



筑紫女学園大学リポジト

中国師範教育の淵源

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/536

中国師範教育の淵源

崔 淑 芬

The Origin of Teacher Education in China

Shufen CUI

はじめに

中国は清朝末期に至り「内憂外患」が頻発、数千年来の歴史の中で未曾有の「大変局」に直面したのである。即ち、鎖国主義は列強の黒船によって根底から覆され、国力は相次ぐ敗戦のために底を尽き、かくて清朝の立国基盤は動揺した。そればかりか、中国数千年の固有文化、社会の伝統、経済体制に全面的な変化を生じたのである。ここに清の開明官僚を始め、民間の有志の士はこぞって西洋文化の摂取に腐心、「夷を持って夷を制する」をモットーとしたのである。ここにおいて1300年の伝統を持つ科挙制度は廃止され、旧教育体制は漸次崩壊していく。代わって洋式の学校制度が導入され、近代教育が漸次形成されてくるのである。

そこではまず、外国の侵略に対抗する「救亡図存」のためには人材教育が重要な課題とされ、その人材を養成する教員培養策としての師範教育の近代化が真先に注目され、その結果として、新式の師範教育が実施されたのである。

本論は歴史的な観点から、中国の近代化を目指す師範教育の創始経緯を考察の対象とし、中国師範教育の萌芽・勃興・発展の沿革と中国近代化との関連性を総合的、系統的に考察することを通じて中国師範教育の特徴と問題点、また現代師範教育にどのような影響を与えたのかを把握し、たうえで、中国現代師範教育の「再創造」の視点を探ろうとする。

一、清末以前の教育と教員の養成

1、教育管理機関の沿革

中国の教育管理機関は、古代の殷商(紀元前約1500～前約1100)から周(紀元前約1100～前771)

時代に至る、中国の教育機関の萌芽する時期に当たるが、これらは一般に開かれた教育機関ではなく、統治階級であった王室と貴族の独占する、統治階級のための教育機関であった。『漢書』によれば、「当時、8歳、或いは13歳で小学に入学。暦と地理と読み書きと計算を学び、家庭と長幼の秩序を知るもの、また、礼・楽・射・御（馬車の操縦）・書・数を学んだ」（注1）。

近くは明（1368～1644）・清（1644～1911）両代において国子監を頂点とする府学・州学・県学、官立書院などの官立学校およびその下にある義学・社学・書院・正音書院・義塾（族塾）・家塾などの公私立学校、さらに清王朝の満洲民族の宗学・覺羅学・旗学などの官立学校が、一つの体系を構成していた。

国子監は、往々にして、科挙に及第し、挙人や進士として官界に進出していくことのできない第二流、第三流の人物が、そこに在籍することによって官界や教育界に出て行くという便宜的な機関に墮していることが多かったし、地方儒学もまた、ときには科挙応試のための所要資格を、そこで獲得するだけの場所であったり、あるいは生員の資格を所有することによって、いくばくかの特権的生活を地方郷村において保持していくための場所に墮していることが多く、教育の場としては有名無実化していることが少なくなかった。それにもかかわらず、両者はいずれも明・清の両代を通じ、形の上では、依然として変わりなく中央と地方における高等・中等の機関であった。また、それとは別に、民間庶民の幼童を対象とする初等教育の機関もあった。

2、教育形式と教師の選定

明・清両時代における社学や義学の教育がそれである。地方の官吏と在郷の縉紳などの指導者が協力し、庶民の幼童に日常所要の道徳的・生活的基礎知識を与えたという点において、とにかく初等教育の体裁を成していたとすることができるであろう。しかも叙上の諸学校には、能力を備えてさえおれば家格、身分、貧富などの差別によらず、誰でもが進学してよいという可能性が開かれていたし、ときによっては学校種別の段階を追って逐次高等の学校に進学することができるという、縦の学校教育体系を具備するところさえもあった。

明代の国子監は府・州・県学からの歳貢生員の入監が、洪武初制以来の基本であった。

生員になるためには、県試・府試・院試などの童試を経過するわけであるが、身分清白でさえあれば応試の資格があった。ただ、明代の正統元年からは社学教育の振興のため、社学の児童の中から優秀者を選び儒学正員に補充することにしていた。ここにおいて、社学→国学監という縦の学校教育体系が形式的ながら形成、実現したのである。しかしながら、それら各級の諸学校における教員の確保と養成について、当時の統治者にはどのような計画と努力が存在していたのだろうか。明の「太祖洪武実録」（巻78）には教員に関する記述があるので、以下に参照してみる。

「洪武15年、儒生呉頤が国子監祭酒に選ばれ、その上諭に曰く、『国学というのは、天下の賢才を集め、四方崇慕、模倣するということであるので、必ず師道が厳しく、後代に正しく模範をなすことである。師道が立たなければ則ち教化が行われぬ。すると、天下になんの取るべきところとならうか。郷は教義を尊崇しなければならぬ。品行方正で、人の師表となる生徒を模範

とするが、これらの生徒に、もし、ただ文辞・暗記のみを教えるのでは、真に教えたということにはならない』(注2)。つまり、師として必ず師道が厳しく正しいことが必要であり、また教えるというのは、ただ文辞・暗記のみ教えていたのでは真に教えたということにはならない。教師は人の師表であるべきことを強調しているのである。また国子監の教師の待遇面で見ると、祭酒から学録まで、与えた品級がかなり高い。例えば、祭酒が正四品、司業正五品、中央官吏の品位に相当する博士が正七品で地方の県丞に相当している。俸禄も、品級に見合っただけでかなり高い。洪武元年と比べると、各品級と俸禄は少し下がっているが、大きな差ではない。

以上から、統治者が国子監の教師に与えた待遇は極めて高かったことが分かる。そこから明代統治者が教師を重視していたことが見える。一方、当時の教師の選定はどのようになっていたのだろうか。永楽22年12月、明成祖が礼部に対し、次のように諭示している。

「教師儒生の職称はみだりに与えてはならない。人材をつくることに関わっているからである。教える教官は必ず有能な儒生から選ぶ。宋訥、呉顥らは、皆需生から祭酒に抜擢した。特に宋訥は名師である。」「師道が立てば、即ち善人が多くなる。国子祭酒、師業などは他の官職など及びもつかないものである。譬えば、宋訥に文淵大学士、胡儼に内閣侍讀、李敬に刑部尚書を与えたほどである。……即ち、博士・学正も、また必ず学識淵博で威望のある者を充てる」(注3)。

つまり国子監の教師は徳高望重な儒子から厳選すること、あるいは、会試落第の挙人が地方儒学の教員として任用されたり、また国子監の監生が儒学の教員に充当されたりする上からの指導という事実があったことが分かる。そこからみれば、明代統治者が教育を重視していたことは明白である。さらに、初等教育機関に当たる府州県学の教員の採用はどのようになっていたのだろうか。明初、府州、県学の教員の殆どは、地方によって儒士が推薦されていた。洪武10年、朱元璋は地方に教員を求めることを命じた(「敕諭浙江温州府、看令所属県分、将民間秀才、除見在教授、教諭、学正、訓導。」卷2)。つまり、浙江省温州府に所属する県から民間の秀才を選び、教授、教諭、学正、訓導などの教職を与えるように命じた。また、洪武26年、国子監祭酒・胡季安に国子監生で年齢30歳以上の優秀な人材341人を選び、教員とするように命じた(『南雍志』卷1「事紀一」)。洪熙元年8月、経学に精通する王煥ら288人を選び、翰林院の試験を受けさせ教員に準じることにした(「洪熙元年八月……選挙経学精通、堪为师範監生王煥等二百八十八人、送行在翰林院考選」『南雍志』卷2「事紀二」)。また民国景県志卷五が「清制、直隸省の府州県の大郷にそれぞれ社学を設置。生員をもって社学の教師となし、彼らの差役を免除する」(「清制、直省府州県の大郷臣堡、各置社学。以生員為社師、免其差役」)。しかし「過失のあった人は師となることはできない。」(「其経断有過之人、不許为师」『續文献通考』卷50)。このように、清代の社学には、地方儒学の生員をもって社学の教員とし、その差役を免除するという特典を与えたという記述もある。これはまた、明・清兩代を通じて多く見られたあり方ではあったが、しかしそれは、明確に制度化され規制化されたものではなかった。教員の確保がめざされ、そのための資質の設定と、その計画的な養成とが国の教育政策として初めて施行されるに至るのは、清朝の末期、近代教育制度の萌芽期に至ってからのことである。

二、新教育の萌芽と師範教育の提唱

1、初期の近代化教育

同治元（1862）年以來、中国は外国の物質的優秀さに対抗するために、まず大砲・軍艦をはじめ西洋式の武器について学び、次に自らの手で製造すべく、その手始めに、学習手段としての外国語を学び、翻訳のできる者を養成しようとした。それ以前の咸豊10（1860）年より、清政府は総理衙門を設置して専ら外変の事務に当たらせていたが、同治元（1862）年には、北京に同文館を設立、同治2（1863）年、李鴻章の奏請により上海に広方言館、続いて翌年には広州に広東同文館を設立した。これらでは西洋言語の学習をし、西洋の書物を読み、翻訳をするまでに至った。また光緒10（1884）年、湖北に設けられた自強学堂も主に西洋言語学習の発展を目的としたものである。これから30年間、西洋言語の学習は当分、中国新教育の中心的課題となった。また軍事教育も重視された。洋務運動は1860年から1895年の時期、近代軍事工業と近代民用鋳工業企業を合計29単位開設した（注4）。これらの近代企業は、軍事産業を中心に、その需要に応じて発展してきたものである。

これこそ、「夷の智を習って大砲と船を作る」（師夷智以造炮製艦）のスローガンに象徴された近代工業の真の姿であった。光緒11（1885）年、李鴻章は武備学堂を天津水師公所の校舎に設けた。言うまでもなく、内外乱敵の刺激によって、これら軍事学堂の開設を見るに至ったのである。さらに、両江総督・張之洞は光緒13（1887）年にも、広東に水師学堂を建てた。また16（1890）年には南京に水師学堂が、19（1893）年には天津に軍医学堂が相次いで設置された。本格的軍事・実業教育の始まりである。この実業教育の方面では、西洋技術の取り入れが「西学」ほどには抵抗なく受け入れられたのである。

また、外人部隊の援助の下に、太平天国を打ち負かした曾国藩、左宗棠らは1865年、外人部隊の優れた訓練もさることながら、西洋兵器・船舶の優れていることをよく知り、江南製船所を設立した。翌年には、左宗棠が福建の馬尾に船政局を設置。こうして造船所には船政学堂が附設された。船政学堂は、はじめ「求是学堂」と名付けられ、前堂と後堂に分けられていた。前堂は、造船技術の習得が目的であり、フランス語で教授したので「法文学堂」とも呼ばれていた。同じく後堂は、運転技術の習得が目的であり、英語で教授したので「英国学堂」と呼ばれた。カリキュラムは、造船及び運転の必修科目の他にも、聖諭・広訓・孝経を読み、政策論も加えられた。1867年8月、沈葆楨が船政学校を視察して、「船政の根本は学校にある」と上奏したことにもみられるように、当時としては技術を重視していたことが分かる。

さらには、「上海機器学堂」が李鴻章によって1865年に設立された江南製造総局に附設され、機械製作とその実習を教育内容としていた。1873年には、芸徒3百余人が増募された。その後、福州造船所附設の教育機関として、「絵事院」「駕駛学堂」「管輪学堂」及び「学圃」の4所が設立されている。工場内に学校を設けて教育するこうした着想は、「産学協同」のプラスの一面があることで、非常に優れたものであると言ってよい。しかしそれが普遍化されないのみか、古い

教育方式が依然として存立し、折角工場に附設された学校を教育機関とは見ず、その附属としは見ないため、あまり成果が見られなかった。

次に、同じく実業学校としての通信及び鉄道学校の開設についても触れてみよう。

西洋教育の重視は、軍事と並んで通信・交通の面にも現れた。同治10（1871）年に上海・香港間に海底ケーブルが敷設され、1879年、天津に電報学堂が開設されたこと等はその例である。翌年8月、李鴻章は陸上の電線の設立を上奏し、電報業務の人材の需要から1882年、上海に初めて電報学堂を設立した。鉄道建設についてはいろいろな問題もあったが、1887年海軍衙門による大沽一天津間鉄道の建設要請が許可されたのである。やはり強兵策優先の洋務運動であることがはっきりしていた。その後、各省の督撫の建議で鉄道建設が始まることになった。蘆溝橋一漢口間の鉄道、大沽一棗州間の鉄道、北京一山海関間の鉄道が相次いで完成した。しかし、鉄道学校の開設は、日清戦争前までは、ほとんど問題にされていなかった。

以上述べたように、前者は「語学教育」、後者は「軍事教育」と位置づけてもよい。その目的は、次の3項目に分けることができる。

第一は、語学堪能の人材を養成して、外交交渉に応じる必要がある。この種の人材があれば、一つには敵の詐術をまぬかれ得るし、また一つには通訳を操縦する労が省けるのである（注4）。

第二は、語学教育を受ければ西洋語でその国の事情を知ることができ、たまたま外交交渉の時にあたって、己を知り彼を知るという効果がある。

第三は『敵カ長ヲ我ニ得ルニ非スハ敵カ命ヲ制スルヲ得』ざる以上、どうしても西洋の書籍を数多く読破し、西洋科学知識や新式戦闘技術を完全に身に付けておかねばならない。この語学教育を施行するのも、やはり語学達者な人材に原書訳述の従事にも専心させんがためなのである。

これら3項の目的のうちで第一項、語学堪能の人材養成が一番最初の動機であった。これについて李鴻章は次のように述べている。

「通商の綱領は固より総理衙門にあり。然れども外交交渉は多事多端にして、勢ひは旗学生のみよく為ス所に非ず。惟ふに視野を廣くして人材を求め、實地に即して適者を尋ぬれば、外国語学を習得する者必ず多からん。人すてに多し、人材また出でん。彼の洋人の専ら長する所のもは数学、自然科学、測量学にして、実務に精しからざるは無し。記して書になしあるも訳出さしたるは十中僅かに一二に過ぎず。必ずまた訳出せられざる書を閲し、その深きを探り隠したるを尋ね、粗雑より入って精緻に至るへし。吾か国の智能の如何にして洋人の下位にあらん也。若し洋人の言語に通曉せしもの互ひそを伝習なきは、一切の汽船兵器等の技術、まさに漸々として熟達するを得ん。吾が国自強の道に裨益する処ありと謂ふべし」（注5）。

この語学教育の結果について、鄭観応は光緒18年に次のような一節を書いている。

「広方言館、同文館は、英才を羅致し教師を招聘しありと雖も、要は唯語学学習に過ぎず。若しそれ天文、地理、数学、化学に至りては、畢竟皮毛を撫歴するのみ。彼の水師武備学堂の如きは僅かに通商は港に設けられ、数また多しとなさず。且何れも西洋に準じて真実成る学習を無し得

ざりしは良に上此を重んぜざるの故をもって、下また意を致さざればなり。良家の子弟皆就学なすを喜ばず、恒に賤民小官の子弟を招きて学生に充つ。況んや監督にその人を得ず、徒らに教師のみ数に充ちて、嘗て専心研習するのものなし。何んぞ傑出の士あるを得んや。非常の才成すを得んや」(注6)。

軍事教育は強敵防衛を目的とする以上、その防衛計画は当然海陸二方面に分けられ、当時にあつては海上防衛が最も重要である。それ故に海軍人材の訓練と艦船の施設とに重点が置かれたのである。これらの語学教育と軍事教育に対して刑部左侍郎、清朝著名政治家、改革家の李端棻は光緒22年「学校ヲ普及セシメントヲ請フノ建議文」(請推广学校折)の中で次のように述べている。「抑モ二十年来、首都ニ同文館ヲ設ケ、各省ニ実学館、広方言館、水師武備学堂、自強学堂ヲ立ツルアルハ皆中外ノ學術ヲ合シ相トモニ講習ナサシメントスルモノニシテ到ル処コレアリ。然レトモ臣顧ミテ教学ノ道未タ全タカラスト謂フハ何ソヤ? 諸館何レモ皆徒ラニ、西洋語学ヲ習メ、治国ノ道富強ノ源一切ノ要書於テ及ハサルノモノアリ。コレ未タ全タカラサルノ一ナリ。自然、科学工科ノ諸学ハ終身、ソノ業務ヲ執ルニ非サレハ、衆ヲ聚メテ講求スルモソノ精髓ニ達スルヲ得ス。今湖北学堂ヲ除クノ外、ソノ餘ノ諸館ハ学業ヲ学科ニ分タス、生徒マタ専門ヲ重ンセス。コレ未タ全タカラサルノ二ナリ。諸学ハ試験測図スルニ非サレハソノ精ヲ得ス。或ハ外遊調査ナササレハソノ確ヲ得ス。今ノ諸館未タ図器ヲ備フルコトナク、未タ外遊ニ派遣スルコトナシ。則チ日日コレヲ反古堆積ニ中ニ求メ、遂ニ空論ヲ論ヒ自ラヨク応用ヲ致スナシ。コレ未タ全カラサルノ三ナリ。仕官ノ途ハ科举ヨリ外ニ出テサレハ俊慧ノ子弟相競ヒテ受験ヲ希ヒ、ソノ富貴ヲ求メントス。ステニ合格ニ至ラハ忽チ学業ヲ廢シ、遂ニソノ能ヲ棄ツ。今諸館ノ教フル所ノモノハスヘテ成年ヨリ以下ナレトモ、苟モ弱冠(二十才)ヲ逾レハ既チ典籍ニ通ス。或は学ニ向ハントスルト雖モ略ソノ謂ハレナシ。コレ未タ全タカラサルノ四ナリ。大厦ハ一木ノ能ク支フル所ニ非ス、汎濫ハ一柱ノ能ク止ムル所ニ非ス、天下ノ大事、事変ノ急ハ必ス士ノ多カラントヲ求メ、カクテ艱難ヲ克服スルヲ得ルナリ。今全十八省数館ヲ数フルノミ。館毎ニ僅カニ数十人ノ好学者ヲ有スルニ過キス。或ハ僻地ニアツテ到ル能ハス、或ハ定員ヲ以テ容ルル能ハス。学館ニ於テハ学徒一人、一人ノ用ヲ為スト雖モ天下ヲ治ムルノ才萬ニ一ニモ足ラス。況ンヤ課業ソノ精髓ニ達セス、幾許ノ為スアルナシ。コレ未タ全タカラサルノ五也。此ノ諸館ノ設立セラレシヨリ二十余年、国家、未ター奇才一偉能ヲ得サリシハ、惟フニスノ故ヲ以テナリ」(注7)。

陳其璋は光緒22年に「同文館ノ整頓ヲ請フノ建議文」中で、次のように述べる所があった。「開館ヨリ数フルニ已ニ三十余年ヲ経タリ。試ミニ問フ。造詣ソノ精髓ニ達シ悉ク実務ヲ辨ヘアルノ有用ノ才ヲ出セシヤト。招聘ナセル洋人教師ハ果シテソノ教授法ノ蘊奥ヲ確知シ、名望衆ニ卓越セルノ西洋優秀者ナリヤト。教授法ハ固ヨリ精緻ナラス、シカモ近年ノ悪弊ハ初期開設當時ニ比スヘカラス。学則ヲ見ルニ月考アリ季考アルモ今ハ則チ洋人教師コレヲ空文ト見倣シアリ。……学生等館ニアルモ亦安逸ニ墮シ、年少クシテ放縱、従ツテ学習ニ専心スルモノナシ。偶マ英明ナル偉オアリトスルモ、亦タ皮毛ヲ剽竊ナシ、徒ラニ劇談ス。三年ノ大考ニ到リテハ洋人教師カ許ニ豫メ赴キテ賄賂ヲ呈シ礼ヲ正シテ款ヲ通シ、モツテ優等タランコトヲ希図ス」(注8)。

以上の文章からみれば、新教育の萌芽期における欠陥の如何がおおよそ推察できる。

- (1) 学生はまだ真に学習していなかった。習得したものは単にその西洋語学、自然科学などでしかなかった。
- (2) 教師は真に教授することができなかった。月課季考等を単に空文にしてしまったということ。
- (3) 武備水師学堂には廉潔な有産階級の学生はいなかった。
- (4) 開設された学堂の数は甚だ少なかった。

この成績不良の原因を、梁啓超は次のように指摘した。「それ(教育)を振興しようともせず、根本的改革を図ろうともせずに、ただうまくやっつてのけようとだけ試みても、成果の殆んど上がらないのは当然であった。疾病の理由には次の三項がある。その一は科挙の制度がまだ改められず、就学するものの才能の貧しさである。その二は師範学堂が建てられて居らず、教師にその人を得なかったことである。その三は専門に分化されていなかったために、学の深奥に到り得なかったことである」(注9)。ここでは、梁啓超は、その原因の一つとして、「師範学堂がまだ建てられていないので、優秀な教師がいない」からだということを強調していた。

2、師範教育の提唱

民国初期の啓蒙思想家、ジャーナリスト、政治家である梁啓超は、当時、中国の設置した京師同文館をはじめ、各学堂が人材養成の役に立っていないことを指摘した。それは、技術的・末梢的なことばかり教え、政治や本当の意味の教育をしないからで、根本を究めないからであるとし、科挙の廃止と師範学堂の設置によるよき教師の整備と、専門教育の充実を強調している(注10)。ここにおいて教育面における近代化は、技術すなわち「用」だけでは到底不十分であり「体」にまで再考を促す姿勢が見えてくるのであるが、少なくとも西洋の学のうち、政治というものに着目して、もう少し深いところで中国の近代化教育を見直そうとしたことは確かである。梁啓超、また張之洞らの「政は芸より急なり」の主張もここから出ている。こうした努力が、師範学堂設置の普及奨励、促成教師養成、さらにその濫造に対する反省、優級(高等)師範学堂の設置、日本教習の招聘となっていくのである。

また、上記論文の中で梁啓超は、大学堂・中学堂の教員を師範学堂の卒業生の中から試験によって採用していくべきだということを主張している。しかも試験の成績の最も優秀な者は大学堂・中学堂の総教習に、次に位する者は大学堂・中学堂の分教習かあるいは小学堂の教習に採用すべきであって、そうすることによって天下の俊秀を教育界に誘致することができるとする見解である(注11)。そこからみれば梁啓超の考える師範学堂は、ただ小学校の教員を養成する場だけには限定されず、試験採用によるとはいえ、中学校の教員も大学の教員も基本的にはそこで養成される総合的な教員養成の学校であるところに特色があった。

当時の知識人だけではなく、官僚らも師範教育の重要性を認識していた。光緒24(1898)年、清朝総理衙門が『遵籌開辦京師大学堂折』の中で次のように述べている。「西洋では師範学堂を最も重んじる。先ず良い教師を得て、それから学生が巨大な成果をあげることができる。中国で

はこうした前例がないため、故に各省の学堂は効果をあげることができない」。

また光緒29（1903）年には、清政府学務大臣・張百熙は「辦理学堂首重師範」、そして張百熙、張之洞、榮慶らは、『学務綱要』の中で「各師範学堂の設立を急げよ...初級師範学堂は小学を教える師範生を養成するところである。学堂創立者は先ずそこから始めなければならない」と、再び強調した（注12）。すなわち、「師範教育を振興することは焦眉の急である。各学堂は必ず教師あり、その教員を養成するためには『宜首先急辦師範学堂』」と述べている。

中国の官僚は、急速な近代化が当時の中国にとって緊急必要事であったことを認識していた。彼らは、先ず「西洋技術の摂取を」と考え、次には中国におけるそれら技術者の養成の試みとなり、さらにその教育のための制度を完備させ、技術ばかりでなく、法制、産業に及ぼし、教育すなわち近代的な系統的・組織的学校の創設を始め、それに必要な教師育成の重要性を認識していたのであった。それを初めて実現させたのが、南洋公学師範院である。当時の大資本家であり大官僚でもあった盛宣懷（1844～1916）が光緒22（1897）年、上海に創設したものである。

中国教育史に関する諸論者の中で、近代的な教師養成機関の創設を述べる者の中には、盛宣懷が上海に創設した「南洋公学」をもってその最初であるとするものが多い。陳青之の『中国教育史』が「中国近代において師範教育は南洋公学から始まった」（「中国近代之有師範教育、始於南洋公学」）（注13）。余書麟の『中国教育史』が「この師範院は中国師範教育の始めである」（「這師範院是為中国師範教育之始」）（注14）。台湾師範大学民国49年が「翌年、盛宣懷が兩江に転任し、又上海で師範院一校を設けた。中国ではこれが師範学堂の始めである。」（次年盛宣懷調任兩江、又在上海設師範院一所。是為中国有師範学堂之始」）（注15）と記す類などがそれである。

次は、その中国新教育制度萌芽期における教師養成機関としての「南洋公学師範院」の実態の考察を通じて、中国最初の師範教育の特徴、教育趣旨、またその影響はどのようなものであったかを究明したいと思う。

三、南洋公学の師範院と教員養成

1、南洋公学の創設

中国の師範教育は、光緒23（1897）年に設置された南洋公学の師範院に始まるが、国家によってこれが採り上げられたのは光緒28（1902）年の欽定学堂章程である（注18）。

慮紹稷が『中国現代教育』の中で、「光緒23（公曆1897）年、盛宣懷が創立した上海南洋公学師範院は、中国の正式な師範教育の始まりである」（「光緒二十三年（公曆1897年）、盛宣懷創辦上海南洋公学師範院、是為中国有正式師範教育之始」）（注16）と述べていた。

つまり、1897年上海に創立された南洋公学師範院が、中国における最初の近代的師範教育機関だったのである。『交通大学校史』によると、南洋公学は上海交通大学の前身である。光緒22（1896）年4月8日、招商局と電報局の督弁・盛宣懷が上海の徐家匯で南洋公学を創った。その経費は全て兩局の紳商が捐献しているので「公学」と命名された。全校を

①範院：中国では初めての高等師範学校である。優秀な学生30人を選択して師資として養成する

②外院：師範院の附属小学校

③中院：中学校に相当する学校

④上院：大学に相当する学校

の四院に分けている。

なぜ盛宣懷が師範院を設けたのかについて、先ず盛宣懷の経歴を見てみよう。

盛宣懷、清末の官僚資本家。字は杏蓀、号は愚齋、江蘇省武進県人。科挙に及第せず、献金によって官位を得た。李鴻章の最も有能な幕客の一人として、清末に企てられた新式企業、例えば電報、汽船、鉦山採掘、鉄道建設、織布工業などの管理経営者となった。宣統3（1911）年、清国最初の責任内閣の郵電部大臣となった（注17）。このような大企業家、大官僚が南洋公学・師範院を創立した直接の原因は、彼が光緒34（1908）年の8月から11月初旬まで3カ月、日本を訪問したことであった。その時の盛宣懷は清政府の郵伝部右侍郎、開辦商約大臣であり、また漢冶萍石炭鉄公司の主宰者であった。彼が書いた『東遊日記』によると、訪日の目的は次の3点であった。(1)病気の治療（重い喘息であった）(2)日本側と中日合弁の漢冶萍公司についてさらに交渉する(3)日本の工場・鉦山を見学し、進んだ技術経験を学ぶ。

日本に滞在中、彼は長崎、神戸、横浜、東京、大阪、下関、尼崎、京都、若松を訪問するとともに、伊藤博文、大隈重信、桂太郎、高橋是清、松方正義、小村寿太郎、松尾臣善ら日本の政・財・商工界の主要人物と会見した。そして日記中に、日本の幣制改革の進展状況や銀行体制、硬貨鑄造の現状を観察し、その記録を残している。また川崎造船所、日本製鉄廠、三池炭鉦、大阪造幣局、尼崎の醸造醬油株式会社、京都の磁器工場や織物株式会社の訪問記録、島津製作所等の生産、設備、発展の状況などをみな詳しく記録している。『東遊日記』の中で彼は、常に中日両企業の関連事項を比較しており、ここからいろいろなヒントが生まれ、実用知識がよく学べるとし、また感慨をよく記している。例えば、日本製鉄所はもともと十数名のドイツ技師を招聘していたが、その後日本は自国の技師を養成すると外国人技師を解雇し、給料の節約ばかりか仕事もより熱心になるという話を聞いた盛宣懷は「中国での専門学校の設立は実に緊急事である」ことを実感したという。また彼が、超大型企業の川崎造船所を見学した時、工場建設が極めて簡素なことに大変意外と映り、見学を案内していた同所の松方所長にこの点を質問した。松方の答は「実業に従事する者は一般に實際面を重んじ、外観の飾りを気にしない。早稲田大学でも、有名校でありながら、校舎は凝っていない。これは敵国のみならず、余は英独の工場へ行ったが皆しかりである」というものであった。盛宣懷は、「中国が工場を建てる場合、先ず建物に念を入れる。もしこの工場に外国人を招聘する時は、『更に念には念を入れ』、最後に『家は建てたが資本は半分消えてしまい』、工場は中途半端で立ち消えになる」と言う（『東遊日記』所収）。

日本での参観訪問を通じて盛宣懷は、中国での出発点は先ず教育の振興であることを痛感したのである。特に師範教育を強調した。

「私は次のように思っている。師道を立てれば則ち善人が多くなる。故に西洋の国は必ず師範

から源を発する。蒙養が正しければ則ち正統教育が始まる。故に西欧諸国の教育は必ず小学が土台になっている。これは中外古今の教育宗旨が異なることを示している」(注18)。

ここでは、欧米が師範教育を重視していることをあげるとともに、さらに小学校教育が古今中外を通じ、すべての教育の基底となる大切なものであることが述べられている。また、「しかし私は前年、天津頭二等学堂を創設し、教習を求め生徒を募集した。(教習の)ほとんどは西文に精通する者で、経史大義の基礎を浅くかじっている程度である。中学(中国の伝統的な学術)を研究している者はおおよそが文章・言葉に夢中になって喋り続ける。才能ある教師が乏しく良い生徒を選びすぐることも難しい。このような状況では私は、倍も労力をかけても、半分しか成果は上がらないと思う。その淵源に導かなければ綺麗な水は流れることはできない。基礎が正しくなければ、その構造を堅固にすることはできない。初め、南洋公学を設けることを考えたが、それを模倣して天津に二等に分けた学堂をつくろうと思っている。……ましてや師範学堂は、学堂の中でも大切なもので、急いでつくらねばならない。既に病深く、治癒する事が求められている。師範学堂の設立は焦眉の急である。今、大急ぎで追い掛けても、おそらく間に合わないだろうと心配している」とあり、この中で彼は、「況師範小学猶為学堂一事先務中之先務」と、師範教育、特に初等師範教育の重要性を強調している。彼は、よい教員を得ることと、すべての教育の基底となる小学校教育を確かなものとして出発させるために、先ず師範学院と外院とを設立することの必要性を認識していたのである。しかし、ここでもまだ、南洋公学内における師範院設立の趣旨は、必ずしも明確な形で説述されているとは言い難い。しかし、同じく盛宣懐の摺分の中には次の一節がある。

「直ちに昨年二月間、才能ある者14名を選び、先ず師範院という学堂を設け、外国の教習を招聘することを計画、中国と西洋の学問を教えることとした。その学問が正しく、実用的で、しかも生徒が勉学に勤しみ、教習がよく教え導くことを目標となす。後、日本師範学校が附属小学校を持っていることを模倣して、特別に10才以下の聡明な幼童120名を選んで学ばせる外院を一つ設立、そこでは師範生をクラス分けして教えさせる。そのようにして一年もすれば、師範生は勉強しながら教えることができ、実用・学問両方とも達成することができる」(注19)。

この一文が、先にも述べたように南洋公学の創設自体を“教員養成教育推進のため”との速断に陥らせる原因となっているのである。すなわち、師範院の学生は、中西の各学問を勉強の上、勤学と善誨——教示の方法に熟達することを以て指帰とした。外院は日本の師範学校の附属小学校に倣って設立したものであり、師範院の学生が班に分かれてこれを教える。すなわちここで教育の実習をする学校であった。そのために師範院諸生は且つ学び且つ教え、知行ならびに進むの益を得たというのである。確かにこの一文の説述の限りでは、外院の設立は師範院の教育目的を達成する手段としての一機関として設立されたもの、と言わざるを得ない。そしてまた、師範院と外院とから出発した南洋公学は、近代的教員養成の学校として出発した、と考えられやすいわけである。

この盛宣懐の外院(即ち小学)と師範院の構想は梁啓超の師範教育振興の主張に近いと言える。

梁啓超は「論師範」の中で、「日本の興学は善行である。…師範学校が小学校と並び立つ。小学校の教習は即ち師範学校の生徒である。数年後、小学校の生徒が中学、大学の生徒に上がって、小学の教習、即ち中学・大学の教習に上がることができる。故に師範学校の設立は、様々な学校の大切な基礎である。」(注25)と述べている。つまり盛宣懐の「師範と小学の創立は学堂の中で最も大事である」、また「日本師範院は附属小学校を持っていることがよい」との認識は梁啓超の視点とほぼ同じである(注20)。

梁啓超が「師範を論ず」を発表した翌年の1897年2月には、盛宣懐は既に上海に設立した南洋公学の中に師範院を設けていた。これはやはり、教員の自国内自給をアピールする梁啓超の教育論が盛宣懐に刺激と啓発を与えたと思われる。

2、南洋公学の師範教育

南洋公学師範院は光緒22(1897)年4月7日、上海・徐家匯の民間アパートにおいて正式に開学された。「第一期募集した師範生は40名、皆20歳から35歳までの青年であり、ほとんど挙人、廩生ばかり。最初師範院は授業がなかったし、教員の授業時間もはっきりしていなかった」が、「1898年から学科によってクラスを分けた」。その構成が師範院と外(小学)、中(中学)、上(高等学校)院の4院である。上・中・外の3院の構成人数は「外院生4クラス一百二十名、中院生4クラス一百二十名、上院生4クラス一百二十名」(南洋公学章程第二章第三節)であった。また「外中上三院学生をそれぞれ4クラスに分け、各クラス三十人」(同第三章第三節)と三十一人一班である。さらに「外院生至第一班、通昇中院第四班、中院生至第一班、通昇上院第四班。上中外院学生、皆歳昇一班」(同第三章第二節)と、1年1班進級が原則として規定されていたのに対し、師範院は「師範生分格五層」と五層分格の制度であった(同第三章第一節)。「師範生合第五層格、准充教習」(同第三章第二節)は既述した通りである。第五層格学生は最上級学生に該当しているが、層と学年とは必ずしも同一ではなかった(注21)。

外院・中院・上院の3院は、小・中・高一貫教育という教育体系採択の建前に立っていた。したがってここに集まる学生は、外院入学の際にだけ試験を受け、その上で2カ月間の仮入学の処置が取られるだけであった。その間の事情については、南洋公学章程第六章第一節の「師範院生の試験に合格した後、受験生には仮入学の資格である白据を与える。師範院で2カ月の仮入学をさせ、その成績によって第一層の者には藍据、第二層の者には緑据、第三層には黄据、第四層には紫据、第五層には紅据を与える」によって知ることができる。また、班次別による学年進級制度をとらず、層格制に基づく順次昇格の方法をとったのみならず、層格制の内容自体が、いかにも古い儒教倫理的教師観に基づく教師像の育成に重点を置いたものであり、学術・知識の育成向上よりも教員としての品性と教育技術の訓練に重点を置く傾向の強いものであった。南洋公学章程第三章・四院学生班次等級の第一節が、そのことを示している。つまり「師範生はそれぞれ五層に分られ、格(座右の銘)を持っている。第一層の格は、学問に対する意欲を持ち、よき人材となることができ、しっかり教えることができる資質を持ち、興味が素晴らしく、礼儀は正しく、

遠大な志を持ち、性格は温和なこと。第二層の格は、よく学びよく教え、学習に対しての根気力がある。規則に従い、よく相談する。公を先とし、私を後にする。第三層の格は、よく教え導く。よく観察し、秩序正しく、支配し、臨機応変である。第四層の格は、限界を気につけ争うことがない。また妬まず、驕ることがない。けちけちせず、行動が俗に流れることなく、怒らない。第五層の格は、性格温厚で、学問によく精通し、知識が広く度量が大きい。謙虚で、落ち着いていることである」。しかもこの第一層から第五層までは、人によって進捗の度合いが違って、
「師範院の生徒を教習に充てるのは、速くても1年以後とするのを基準とする」（「師範院諸生補充教習、至速以一年後為準。」）というのである。これによっても、学年進級制によることもなく、特別な進格制によっていたことがまた明白である（注22）。

叙上のように、師範院は南洋公学諸院のうち、最も早く創設されたというだけではなく、特別な構成になっていたし、特別な教育内容と方法とが採択されていた。外院が日本の附属小学校に倣い、教育実習の場として師範院とほとんど同時に設立されただけではなく、さらに相次いで設立された中院と上院においてさえも、その意味するところは必ずしも明確ではないが、ともあれそこにおける教育は「上中両院の教習、皆師範院の出身」として、師範院生を充当することに定めていた。このようなところから、南洋公学の中心は師範院にあったし、その設立趣旨も、師範院においては近代教育にふさわしい新しい教員を養成することに主眼を置いていたのではないかと見られやすいのである。

中国の有名な政治家であり、中華民国初代の教育総長である蔡元培(1868. 1. 11～1940. 3. 5)は、1901年から南洋公学で教鞭を執ったことがある。彼はその後、南洋公学の特別クラスの主任教官にもなっている。この特別クラスは、開設準備中であった経済学科への進学希望者を対象として、英語・数学・政治学・財政学などの予備教育を施す目的で編成され、30数名の生徒が学んでいた。彼らは半日を読書に、半日を英語、数学の勉強に充てることと定められていた。蔡元培は各科目の必読書を指定し、生徒に常時1～2科目を振り分けた。生徒は、蔡元培が指定した書物を書名リストの順にしたがって図書館から借り出すなどして読まなければならなかった。蔡元培は読んだ本の内容についてのメモを生徒に毎日提出させ、自ら講評を付けて後日生徒に返すようにした。また彼は、日本語の学習を生徒に奨励し、自らも日本語を教えた。蔡元培は日本語を独習していたので、話すことはできなかったが読むことはできた。世界的な名著は多くが日本語に訳されていて、値段も安いので日本語版から中国語に訳するのが世界の新思潮を取り入れるうえで最も手取り早い方法であると彼は考え、日本語から中国語への翻訳の要領を生徒に教えたのである（注23）。

蔡元培の学生であった黄炎培（1879～1965. 12. 21 教育家・政治家）は、「蔡先生の後進を指導する主旨は、千言万語、帰するところ“愛国”の一語につきる」と回想している。また、彼の教育方法には6つの特徴があったという。その一は、書物学習と身体鍛練との調和である。その二は、教科書と参考書いずれも重視し、三は読書、作文のいずれも重視したこと、四は講義と座談の併用、五は個別指導を重視、学生の個性伸長に意をもち、六は学生と共にしばしば討論し

たことである。「先生の教育者としての日常は、“学んで厭わず、教えて倦まず”の精神で一貫していたと思う」と黄炎培は回想する（注24）。当時、蔡元培の学生であったのは黄炎培の他、邵力子、王世徵、胡仁源、謝元量、李叔同等40余人であった。一時、南洋公学は愛国の革命知識人が集まる場所ともなったのである。

終わりに

以上のような経緯から、中国における教育の近代化は外的要因に触発された結果出発したのであり、それに負うところが大きいという論調が大勢を占めてきた。しかし現実には、その見方は、中国における伝統的な教育制度・体系がその基礎あるいは底流となっていたことを看過していた、皮相的な認識に基づくものではなかろうか。

確かに中国師範教育の発生は、当初においては歴史的、自発的、内在的な要因もあったが、ほとんど外的刺激による強制的なものであった。

1911年の辛亥革命によって、中国初の共和国が成立した。この政治的変革は、教育の方針・内容に大きな変化をもたらした。但し、清末期にしても民国初期にしても、中国の伝統的思想・文化（中学＝中国の学）は固守しながら、日本の明治後期の師範教育体制を手本にして発展してきた。当時の教育改革の先頭に立つ開明官僚は、貧弱な中国をどうすれば強くすることができるか、つまり富国強兵となるために、先ずとにかく、教育による人材養成から着手しようと考えた。その目的達成のために着目したのが日本である。同じ漢字文化の日本を通じて、西洋文化を吸収しようと考えたのである。しかし、その根底にあるのはあくまでも「中体西用」であった。この「中体西用」の発想から、日本を手本にしてみたりアメリカを手本にしてみたが、それはある程度、盲目的模倣であった。やみくもに見える西洋文化の吸収という背景には、官僚政治家としての野望があったことも当然考えられよう。しかし全体的に見て、そのことが中国の教育近代化過程において、結果として量的にも質的にも、見るべき顕著な進展を促したことも否定できない事実である。

中国における近現代学校教育制度の成立・沿革は、舒新城の言うように「初めから政治問題の中に含むこととなり、純粋な教育事業ではなくなった。これは近現代教育史の特質の一つで、他の国には容易に見られないものであり、近現代教育史を研究するものが見落としてはならない重要な事柄である」と考えられる。

1985年以来、重要な課題とされた師範教育の問題を解決すべく、いろいろな施策も漸く具体化するようになった。しかし、中国の現代師範教育の「再創造」をどこから着手するのか、歴史からどのような経験と教訓を汲み取ることができるのかは、重要な問題である。

注

- 1、班固『漢書・食貨志』第四上 P.427 ちくま学芸文庫 平凡社 1988年
- 2、『明太祖実録』卷78 台湾文史哲出版社 1987年
- 3、『明史・選舉志一』卷69 P.1675 北京中華書局 1974年
- 4、『中国近代史』第二節 P.148~180 中華書局1983年
- 5、中国史学会主編『洋務運動』第4冊『李文忠公奏議』卷9「請設広方言館疏」 上海人民出版社 2000年
- 6、『皇朝経世史』三篇卷二「西学」台北 国風出版社 1965年
- 7、王延熙・王樹敏『皇朝道咸同光奏議』「変法類学校」64卷 上海出版社 1902年
- 8、王延熙・王樹敏『皇朝道咸同光奏議』「変法類学校」39卷 上海出版
- 9、1898年6月11日「時務報」卷5「論学校一」
- 10、「梁啓超与福沢諭吉」(『文史 哲』2004年第3期 山東大学学報)
- 11、『飲氷室文集』第一集 P.125 雲南教育出版社 2001年
- 12、多賀秋五郎『近代中国教育史資料・清末編』P.2 日本学術振興会 1972年
- 13、陳青之『中国教育史』P.597 台湾商務印書館 1963年
- 14、余書麟『中国教育史』下 P.905~906 台湾師範大学 1951年
- 15、陳東原『中国教育史』P.478 福建教育出版社 2009年
- 16、慮紹稷『中国現代教育』P.96 商務印書館 1934年
- 17、呉紀先「盛宣懐与辛亥革命」『辛亥革命五十周年論文集』
- 18、舒新城『中国近代教育史資料』人民教育出版社 1961年
- 19、『飲氷室文集』第一集 P.34 台湾中華書局出版社 2001年
- 20、陳啓天『最近三十年中国教育史』P.53 台北. 文星書店出版社 1962年
- 21、『交通大学校史』P.21~27 上海教育出版社 1986年
- 22、『盛宣懐奏陳閩辦南学公学情形疏』第三章
- 23、蔡元培『記三十六年以前之南洋公学特班』『交通大学40周年記念特刊』 P.52
- 24、黄炎培『敬悼吾師蔡子民先生』 重慶「大公報」 1940年3月23日

(さい しゅくふん：アジア文化学科 教授)

中国師範教育の淵源

崔 淑 芬

The Origin of Teacher Education in China

Shufen CUI

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第27号
2016年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 27
2016